

皆は、一人のために。

白藜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《事の始まりは中国軽慶市で、発光する赤子が生まれたというニュースだった。

それ以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。『超常』は『日常』に、『架空』は『現実』に成り代わっていき、世界人口の約8割が何らかの特異体質を持つ超人社会。それが現在の世界の実情である。

そしてそんな混乱渦巻く世の中で、誰もが1度は空想し憧れた1つの職業が、脚光を浴びている。

“ヒーロー”。

世は、その新たな職業を、何てことはないように受け入れている。

》

これは、超常黎明期を経て、悪の跋扈する混迷極める時代を駆け抜ける、ヒーローたちの物語だ。

約束

目次

約束

「なんで、なんで教えてくれなかったんだよ！なあ！」

夕暮れの帰り道。午前で授業が終わったあと、修了式を終えた俺は、一人の少年に詰め寄られていた。

彼の息は荒い。胸ぐらを掴む手は、怒りからか微かに震えている。

「別に、意地悪で言っただけじゃなかった訳じゃないよ。何て言うかさ…」

「他のやつらには教えてただろうが！ふぎけんなよ！」

こちらの弁明を聞く気はないのか、彼はカッターシャツの胸元を持つ手に力を込めた。首が締まって苦しいけれど、これが俺に対する罰なのかもしれない。なんて、そう思った。

「…ごめん」

「ごめんじゃねえだろ！ふぎけんな！ふぎけんなよ！俺たち、ずっと一緒だったろうが！」

彼は、必死だった。両の手はわなわなと震え、歯を食い縛っていた。涙が溢れそうだった。

「…嫌われるのが、怖かったんだ。父さんの転勤は、半年前から決まっていた。先生たちにもその話をして、皆にもその話をした。お前には自分から伝えたいからって、他のやつからお前に伝わらないように口止めもしたよ。お前は親友だからさ、自分の口から、伝えるつもりだった。」

「でも、いざそのときになったら、なんにも言えなかった。指が震えて、声がでなくて。だっせえよな、笑ってくれ。」

「…お前、バカなんじゃないの。」

途切れ途切れな俺の話を聞いていた彼は、震える声を隠しもしないでそう言った。

「そんなことで、嫌いになんてなるかよ！ずっと一緒にいたんだ！嫌いになんてならねえよ！ふぎけんな！ふぎけんなよ！お前、俺を見くびってるんじゃないよ！」

「家族のことで荒れてた俺から、嫌なことを忘れさせてくれたのはお前だ。親父と言い合いをして、家出したときに匿って、なんも聞かず

に笑って牛丼奢ってくれたのもお前だ！俺が親父に殴られそうなきに、震えてんのに助けようとしてくれたのも、お前だ！そんなお前を、今さら嫌いになんてなれるわけねえだろうが！」

大粒の涙がこぼれ、茹だるような暑さのコンクリートに染みを作る。彼はクソツ！と悪態を吐き、手を乱雑に話した。そのまま尻餅をつき、俺は顔を俯かせる。

「分かってたさ。お前は嫌いになんてならないって。けど、それでも言い出せなかった。お前は無愛想だけど、優しくない訳じゃないから。変にこれまでと変わるかもしれないって、そう思ったら、怖かったんだ。」

だって、お前とは対等な関係でいたいから。そう溢すと、彼は震えながら小さく溜め息を吐く。

「お前、やっぱりバカだよ…」

ぐしぐしと目尻を擦り、溜まった涙を拭う。彼は少し晴れやかな顔で、俺の背にもたれるように座った。

「なあ、約束しよう。三年後、俺は、必ず雄英に入学する。」

「…俺も。絶対に、雄英に入れるように頑張る。」

どちらからともなく、そんな絵空事のような約束を取り付ける。互いの顔は見えないけれど、きつと笑っているのだろう。

二人同時に、立ち上がる。さよならは言わなかった。だって、俺たちはまた会えるのだから。

「またな、焦凍」

「ああ、またな、皆統。」

夏空の下の約束を、俺たちは生涯忘れることはないだろう。長い、永い戦いの日が始まるまで、あと、三年。